

## もっと知ろう “陶”

### 30 方言昔話(3) 観音様の怒り

これは江戸時代の終わりの話しだけんどの一。

その頃の猿爪村には村の真ん中あたりを中馬街道が通っての一、信州から米や酒らを尾張に、尾張から塩や茶碗やらを信州に運ぶ馬や人が結構往来しとったんや。

信州の人が、馬を引いて吹越峠を越えてやれやれと猿爪村のある所まで来るがさいと、突然、馬が嘶き前へ進みやへん。前足をあげたり後ろ足で蹴ったりするもんだから、馬に積んだ荷物はわやだわさ。馬引きはうろこいているが、それでも何とか馬をなだめて荷物があんじゃないのを確認して、やっところまで通り過ぎるのやった。こなあだも、大八車を引いて通りがかった隣村の人が、同じ場所で車の車輪が外れて立ち往生しとったげな。

そんなようなことが何べんかあったもんだから、村人んたあが「これは何かある。祟りでもあるんじゃないか。」と噂をし始めたころ、村に急病人が出たんだと。ほんだもんで、村の衆数人で急病人を戸板に乗付けて明知の医者



まで向かう途中にの一、この地点まで来るちゅうと、病人は急に頭を痛がっての一、頭を上げるがさいと何かを叫びながら山に向って指差一た途端、息絶えてしまったと。

庄屋どんと村人数人がやっぱ何かあると、病人が指差一た山に入ってみるがさいと、倒れた木のくろで雑草に埋もれたばばあ馬頭観音さんが見つかったの一。庄屋どんが「こりゃあ観音様の怒りだ。」「早いとこ水をぎょうさん汲んで来い。」と叫ぶがさいと、庄屋どんが中心になって経をあげながら観音様を心こめて洗い清めたそ一な。綺麗になった観音様は街道横まで運ばれ、新しい土台に安置されるがさいと村の衆みんなで花を手向けて不遇をお詫びし、えらあおっさんと呼んで経をあげてもらったげな。

そしたら、じっきに観音様の怒りは癒えたのか、何事もなくの往来できるようになったとき。

この馬頭観音は、現在、猿爪本町の山善さん宅前で花を手向けられ、今も通行人を見守っておらっせる。